

前衛芸術家としてのオノ・ヨーコ 個展開催、再評価進む

[文化往来](#)[フォローする](#)

2025年6月24日 5:00 [会員限定記事]

保存



「Mind Object I」(1960/66年)は、並んだものを心の中で組み合わせて1つのものを作るように鑑賞者に促す。

前衛芸術家のオノ・ヨーコの個展「A statue was here 一つの像がここにあった」が小山登美夫ギャラリー（東京・港、品川の2カ所）で開催中だ。「ドラゴン・レディ」などと呼ばれ、ジョン・レノンのパートナーだったイメージが先行しがちだが、近年は70年以上にわたるアーティストとしての活動が再評価されている。初期作品を中心に、想像力の可能性を信じるオノの作品に改めて触れられる機会だ。



部屋の中央に透明な台座が置かれている

何も載っていない透明の台座がある。近くの壁には「A statue was here（一つの像がここにあった）」と小さく書かれている。その言葉を読むと、どんな像がここにあったのか想像せずにはいられない。かつての偉人やヒーローをたたえる像があったのだろうか。では、今の時代にふさわしい像とはどんなものか。白い空間の中に透明や白の物で構成される詩的で美しいオノ・ヨーコの作品は、見るものの想像力の展開を促す。



「Mend Piece」（1966年）では、来場者が実際に修復したものが棚に並び

コンセプトが核になっている作品は、現代の要素も取り込んで東京・港の会場に並び。例えば「Mend Piece」（66年）では、「知恵を持って直しなさい、愛を持って直しなさい それは同時に地球を直すことにもなるでしょう」という言葉とともに、地震で破損した能登半島の白磁の破片が置かれる。鑑賞者はテープやひもを使って破片をつなぎ、実践を通してより大きなスケールの修復について想像する。

思い描けることは、実現不可能ではない。そのための足がかりとして、想像を広げてみる。もう一方の品川の会場でも鑑賞者に参加を促す作品が展示されている。2カ所とも7月5日まで。

(鴻知佳子)



丸を描いたり、包帯を巻いたりできる参加型の作品



[「日経文化」のX \(旧Twitter\) アカウントをチェック](#)

【関連記事】

- ・[「サンプリング」で世界を捉える NY拠点・松山智一の東京初個展](#)
- ・[「らしさ」議論、アーティストがアップデート](#)

すべての記事が読み放題
まずは無料体験 (初回1カ月)

有料会員に登録する

有料会員限定

キーワード登録であなたの
**重要なニュースを
ハイライト**